



富家 孝氏

連合駿台会報

No.333 平成29年5月15日発行
 発行・編集 連合駿台会
 発行人 広報委員長・齋藤柳光
 編集人 事務局・矢嶋まゆ子
 〒101-0052 千代田区神田小川町三十一-二
 明治大学「紫紺館」内
 電話 (〇三三) 三二九六一四七七
 印刷 有限会社 美創

連合駿台会三月例会

「間違いだらけの医者選び」

医師・ジャーナリスト 富家 孝氏

連合駿台会平成二十九年三月の例会を、三月十五日（水）十七時四十五分より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、富家孝氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿台会長から次のような挨拶がありました（挨拶主旨）。

本日は三月としてはかなり寒いなか、大勢の方にお集まりいただき感謝申しあげます。

明治大学の今年度の入学志願者数は十一万三千名を突破し、十一万人を超えたのは五年ぶりという快挙になった。本学と同じように十一万人を超えたのは、近畿、法政、早稲田、日本を含む五大学のみであった。さらに明治大学では十一年連続十万人以上という記録も続いており、これもまた偉業ではないか

と思っっている。

先ほどまでの理事会で議論百出し、決まることが決まらなかったもので、ここでご披露するわけにはいかないので、今日は素晴らしい講演を楽しんでお帰りいただきたいと思う。

当日の講演の主旨は以下の通りです。

医者という職業の持つ特殊性

私が小学校に入学した昭和二十八（一九五三）年当時、男性の平均寿命は六十一・九歳だった。つまり二十二歳で卒業して、五十五歳まで勤め上げると、数年であの世に行けたわけだが、寿命が延びたいまでは、六十歳で定年後も、二十年もの余生が残されることになった。最初に百歳のことが大きな話題になったのは、昭和四十六（一九七二）年の敬老の日、三百三十九人だったが、昨年は六万五千人を超えているのが実情で、大変なことになっていきている。

まず、医療業界の不思議さについて少しお話ししたい。医者というのは、一つには偏差値の高い人ということがあげられる。駿台全国模試のデータでは最高峰が偏差値七十八の東大、次いで七十七の慶応だが、一番低いところでも五十六といわれる（新設医大ができたところは四十九くらいだったが……）。もう一つは家にカネがあることだ。医学部のある大学は八十一校、それに防衛医科大学校

を加えて八十二校あるが、うち私立は三十一校で、日本の私大医学部で最も低い授業料をめぐり、本年、千葉県成田市に創設された国際医療福祉大学でも、六年間の授業料は約千八百五十万円である。以下、二千万円台が九校、残りが三千万円以上ということになる。私立と国立の学費は九・四倍も違う。偏差値が高く金持ちであるという必然性から、どうしても世襲が多い職業であることも特徴である。政界でも、二世以上の国会議員が多くなつたと言われるが、医者の世界では九四％、あるいはそれ以上が世襲とも言われている。ちなみに私の場合も父方母方の親族を含めて三十三人が医者で、他の職業には見られない特殊な集団で、「視野狭窄」という病になりやすい気もする(笑)。

講演などで、私は「医師・ジャーナリスト」と紹介されるため、どこでも「医学博士ではないのですか？」と聞かれるが、私は医師であつて医学博士ではない。巷でよく会われる医者は、医学博士の称号を持つ人が多くと思うが、昨年提出された博士号論文は文系・理系合わせて一万五千六百件ほどあつたが、そのうち四割が保健・医療関係で一番多い。そして特徴的なのは、日本には医者でない医学博士が大勢いることだ。医師免許と医学博士号はまったく別の資格で、医師免許を持った人は、医師として医療行為を行うこと

ができるが、医学博士の学位を得ても、医師ではない者は医療行為を行うことはできない。たとえば元柔道選手でオリンピック代表だった野村忠宏選手は、弘前大学大学院医学研究科で研究を行い、そこで上げたスポーツ医学分野の研究成果によって学位を授与されたわけだ。実は私と同期で慈恵医科大学を卒業したのは百二十二名いたが、その中で学位を持つていないのは三人だけで、ほとんどが変わり者だ(笑)。ただ、日本医師会会長であつた武見太郎氏も、徳洲会の徳田虎雄氏も保持していない。大学院大学を出れば全員医学博士になれるアメリカとは大きく異なり、世界でも珍しいわかりにくいシステムになっている。

話は少しそれるが、昨今、臓器移植問題が話題になるが、それは脳死が出てきたらである。従来、死の判定とは、①呼吸停止、②心臓停止、③瞳孔散大の三つでなされてきた。しかし人工心肺の登場で、脳死が大きく取り沙汰されるようになり、ここで大きな問題が出てきた。民法第三十二条の二に「同時死亡の規定」というものがある。これは、複数人が何らかの原因で死亡し、これらの者の死亡時期の前後が不明な場合に、法律によりこれらの者が同時に死亡したものと推定する。制度をいう。つまり飛行機事故や船舶事故が起きて、全員が同時に死ぬわけではないが、

同じ時間に行っている。そうでないと相続問題に大きく影響するのだ。ある人を脳死、ある人を心臓死(一般死)とすると、取り分が変わつてきてトラブルが出てくるからだ。実際は、脳死判定になるのは百人に一人くらいの例しかないだろうが、こういうことが起こり得ることも知っておいてもらいたい。

外科医は職人としての技術が求められる

日本で一番古くからある科目は、精神科・内科・外科で、外科と内科の区別がないのは耳鼻科と眼科だけだから、ここには高齢の先生も少なくない。しかし他は、たとえば消化器外科の先生はメスを持たない消化器内科へ、心臓外科の先生は循環器内科へ、脳外科の先生は神経内科へ……と専門を変えていく。それぞれの語源は、内科は薬師(くすし)、外科は床屋、精神科は早くからお寺などで取り入れられていたことに基づいている。

では、外科と内科の違いは？ というところ、ご承知の通りメスを持つか持たないかの違いだけである。内科は全身を診ての判断であり、高血圧は血管がやられる病気だから、身体全体に影響するので内科の範疇になる。糖尿病は膵臓の病だが、「五臓六腑」の中に膵臓は含まれておらず、これほど重要な臓器だつたことは、十五世紀になつてわかつた。ちょうど胃の真裏にあり、pancreas(パンクリアス)というが、由来はギリシャ語(pan

「すべて、creas(肉)であり、これはCTに映る。内科の病気は診断がはっきりすれば、治療は自ずと可能になる。」

それに比べ外科は技術である。その人の地位とか身分、もちろん学校に入った時の偏差値とは全然関係ないものだ。同じ手術を何回こなしてきたか、という手術職人としての技術が求められる。それが外科医なのだ。

例えば、心臓の手術といえは、子供で生まれつき心臓の形に異常がある「先天性心疾患」を除けば、最も件数が多いのが「冠動脈バイパス手術」である。これは、心臓の筋肉(心筋)に酸素と栄養を送る冠動脈が動脈硬化を起こして狭くなり、胸痛や息苦しきなどの症状が現れる「狭心症」や「心筋梗塞」を対象とする手術。次が「弁膜症手術」で、これは血液の逆流を防ぐ心臓弁の開閉に異常をきたしたときに行われるもので、弁の形を整える弁形成術や、金属製などの人工弁に付け替える弁置換術が中心である。三番目が「胸部大動脈疾患手術」で、主に大動脈瘤を人工血管に置き換える手術が行われる。大動脈は、心臓から全身に血液を送る血管であり、ここに「こぶ」ができる大動脈瘤は、こぶが破れてショック死する可能性もある。

全国には心臓外科「専門医」とか「認定医」と言われる人が千八百人ほどいるが、年間で百例の手術、つまり週平均二例行ってい

る人は三十人もいないと思う。まして二百例となれば、東京では私の手術もしてくれた昭和大学横浜市北部病院循環器センターの南淵明宏教授、天皇陛下の手術も手掛けた順天堂大学医学部附属順天堂医院長の天野篤教授、イムス葛飾総合病院の吉田成彦院長、榊原記念病院の高梨秀一郎副院長の四人くらいだろう。彼らに共通しているのは、民間病院を渡り歩いてきたことだ。腕のいい外科医は手術の依頼数も多いから、さらに腕が磨かれる。成功率もはっきりしているから、名医の基準が素人にもわかりやすい。実際、手術症例数の多さは、手術成功率の高さにも結びついていく。これは非常に大事なことである。

主として心臓の例を出して話したが、これは臓器が見える消化器と違って、血管が細かい心臓は、脳と並んで技術の差が圧倒的に出る臓器だからなのである。

納得した医療を受けるために

昔は病院で死ぬわけではなかったが、今では病院に行ってしまうと必ず延命措置をされて、「老衰」という死を選択できなくなつた。だから、健康なうちに意思の申告をしておくことは大切だと思う。ましてや年老いてから全身麻酔で行うような手術をしなくてはならなくなつたら、よく考えるべきだ。もしトラブルが起きたら、死んでしまいか植物状態になってしまう可能性もあるからである。

したがってどうしても手術を勧められた場合は、*「違う主任教授に学んだ」* 最低三人の先生の意見を聞いて欲しい。そして術前説明の際は、①メモを取る、②自分の身体のことなのだから、術式を聞く、③もし手術をしなければどうなるか？ 他の方法はいいか？ ということを聞いて欲しい。具体的に最低のことは聞かないとダメで、遠慮する必要はまったくない。日本には千二百万人の入院患者がいるといわれるが、うち〇・四％は医療のトラブルで亡くなっている。大腸がんによる死者四万七千五百人とほぼ同数なのだ。

繰り返すが、もしも手術を勧められたら、まず他の医者 of 意見を聞く、これは絶対である。二番目に病院ではなくて、医者個人のホームページを見る。三番目にこの先生なら大丈夫という「思考停止」に陥つてはいけない。四番目には資料を出さないような先生とは縁を切ったほうがいい。五番目には、認定医とか専門医とかを盲信してはいけない、*「玉石混交」* であることを認識すること。六番目には「神の手」が「紙の手」ではないかを、よく見極めなくてはならない。

日本はすべて火葬なため、亡くなった場所の首長から火葬許可をもらう必要がある。死亡診断書は死亡届と一体となっており、左半分は本人の住所・氏名・本籍などを記した死亡届で、右半分は医師が記入する死亡診断

書（死体検案書）になる。その中の十五番に「死因の種類」というものがある。その中の①番は病死および自然死、②番から⑫番までが、不慮の外因死（交通事故、転倒・転落、溺水、窒息、中毒など）やその他不詳の外因死（自殺・他殺など）で、医者はこれを届けなくてはならないが、これを隠蔽してしまうケースも少なくない。一九九九年、都立広尾病院で消毒液を血液凝固阻止剤と取り違えて点滴したために死亡する事件が発生し、あの時の医者は虚偽有印公文書作成で罰金刑を受けた。同年には、横浜市立大付属病院で、肺手術と心臓手術の患者を取り違えて手術してしまう「患者取り違い事件」も起こっており、この事件を機にいろいろなことが明るみに出てくるようになった。

死因に対し、どうしても納得いかないとか、不審に思うようなケースにぶつかったとすると、まずは原状回復を求めたいだろうが、それはすでに無理なのだから、次は今後の医療ミスに警鐘を鳴らすためにも真相究明をし、損害賠償ということになるだろう。

それでも納得できなければ、最後は「解剖」である。解剖には三つの手段がある。一つは「系統解剖」で、正常な身体の形態と構成を研究する学問（解剖学）のために行う解剖を指す。医者が勧めてくるのは、二番目の「病理解剖」で、病死者の死因、病気の種類

やその本態、治療効果などを解明するために行う解剖だが、ある意味、医者の身内擁護の解剖になる可能性もある。三番目が「法医学解剖」で、不自然死あるいは異状死体について死因究明のために行われる行政解剖と、犯罪が関与した死体あるいはその疑いのある死体について裁判上の鑑定のために行われる司法解剖がある。これを行うにはかなりの労力も必要だが、家族がどうしても納得いかないと思ふ場合は、法医学解剖によってはつきりさせることができる。東京には文京区大塚に東京都監察医務院があり、二十三区内で発生したすべての不自然死の死体の検案および解剖を行ってくれる。

『**疲れたら休む、体は常に動かしている**』

急死の八割は心臓と言われているので、注意して欲しいことをお話しして終わりたい。

まず「脱水」。水分補給は非常に大切で、起床後、午前中、午後、夕方、そして寝る前に二百ccの水を飲んで欲しい。明け方の三時半から五時頃が、血液が一番ドロドロしてしまうので、是非とも今夜からでも始めていたきたい。

二つ目は当たり前だが「アルコールの過剰摂取」には注意すること。お酒は適度であれば死亡率を低下させるという報告もあるくらいなので、上手につき合うようにしましょう。

三つ目は「低血糖」、これは人によって症

状が違い、急死を引き起こす原因にもなり得るので、看過することはできない。

最後は「過労」。特に『昔とった杵柄』と、自分の体力に自信を持っている人は危ない。例えば睡眠時間四時間以下の時は、昔とった杵柄を自負する人も要注意、六時間以上なら十分だと思ふし、逆に十時間以上は運動不足にもなつて早死にするだろう（笑）。

運動するといっても、スポーツクラブなどに通う必要はなく、生活の中で体を動かすことが大切だと思う。いろいろな健康法があるが、原点に戻って、『疲れたら休む、体は常に動かしている』ということにつきるのではないかと思う。以上

【講師略歴】

富家 孝（ふけ・たかし）

一九四七年、大阪生まれ。

一九七二年、東京慈恵会医科大学卒業。

病院経営、日本女子体育大学助教授を経て、早稲田大学講師、青山学院大学講師歴任。

現在、「ラ・クイリマ」代表取締役専門は医療

社会学、生命の科学、スポーツ医学。

慈恵医大相撲部総監督（六段）、新日本プロレス・コミッションドクター、格闘技通としても知られる。

テレビ、雑誌にて医療に関する出演、執筆多数。

『不要なクスリ 無用な手術 医療費の8割は無駄である』（講談社現代新書）他六十五冊以上の著書がある。

『不要なクスリ 無用な手術 医療費の8割は無駄である』（講談社現代新書）他六十五冊以上の著書がある。

◆新入会員ご紹介

前会までの理事会で承認され、入会された方を紹介します。(敬称略・到着順)



米山 明広
よねやま あきひろ
平成元年・工学部卒
スルガ銀行(株)・代表取締役社長
静岡県沼津市在住



鬼塚 和也
おにつか かずや
昭和六十三年・文学部卒
(株)アイクリック・代表取締役
東京都国立市在住



神林 光
かんばやし ひかる
平成十五年・法学部卒
神林光法律事務所・代表弁護士
東京都足立区在住



関根 宏一
せきね ひろかず
昭和三十九年・農学部卒
関根床用鋼板(株)・取締役相談役
東京都墨田区在住



角田 裕一
つのだ ゆういち
昭和五十年・商学部卒
角田商事(株)・代表取締役社長
山形県寒河江市在住



土谷 幹男
つちや けんお
昭和五十一年・経営学部卒
菱甲産業(株)・代表取締役社長
大分県別府市在住



奥岡 征彦
おくおか まさひこ
平成三年・経営学部卒
(株)メディア4U・代表取締役
東京都港区在住

◆明大ニュース

●二〇一七年度入学式を挙行
新たに八千三百五十八人が明大生に

明治大学の二〇一七年度入学式が四月七日、日本武道館(千代田区)で挙行され、満開の桜が咲き誇る中、夢や希望を抱いた八千三百五十八人(学部生七千三百十九人、大学院生千三十九人)の新入生が、明大生としての第一歩を踏み出した。式典は学部・大学院別に午前・午後の二部制で行われ、いずれも土屋恵一郎学長の告辞、柳谷孝理事長の祝辞、新入生代表による宣誓と続いた。

土屋学長は告辞で、新入生の入学を祝した上で、創立者の一人で初代校長でもある岸本辰雄先生の『明治大学の教育は、服従の教育ではなく、学生自身の欲求に基づく教育である』という言葉を用い、「学生であれ教員であれ、自ら何を学び、研究するのかを考え、その欲求のもとで、自由な学問研究に取り組むことが、創立以来受け継がれてきた明治大学の主張である」と説いた。さらに、「君たちの中にある無限の可能性に気づいてほしい。明治大学は全力で支える」と新入生のさらなる飛躍に期待を込め、激励した。

祝辞に立った柳谷理事長は、「個を磨き、多少のことでは動じない胆力を備えれば、将来の可能性は広がる。そして、本学で培ったことを生かして、国や人種の違いを超えて協調できる世界を希求し、人類と地球環境の調和した未来を創造していくことに寄与してほしい」と新入生への期待を述べた。

続いて、午前の部で辻田梨早さん(経営学部)、午後の部で上村優希菜さん(総合数理学部)が新入生を代表して宣誓。二〇二〇年に東京五輪を控え、さらにグローバル化する社会に対し、「次世代を担う私たちに求められるものは何かを追究し、勉学を共にする仲間や、先生方との日々を通じ、私なりの答えを探求していく」(辻田さん)、「四年間でさまざまなことに関心を広げ、幅広い教養を

身につけ、専門分野を極めることで、自分の新たな可能性を発見し、『個』を確立することが必要である」(上村さん)と力強く抱負を述べた。最後は全員で校歌を斉唱し、閉式となった。

新入生たちは、これから始まる大学生活への期待に胸を膨らませた様子で会場を後にしていた。

●格付投資情報センターから

「AA(新規)」の格付を取得

明治大学はこのたび、(株)格付投資情報センター(R&I)から「AA(新規)」[格付の方向性・安定的]の格付評価を受けた。

これは、本学の持つ教育・研究の質の高さと学生募集力、就職実績、卒業生の厚み、国際化推進・教育力の向上を目的とした改革への取り組みなどが総合的に評価されたもの。「AA」は、同社の格付評価を受けている学校法人では最上位の評価となっている(四月五日時点)。

今回、経営財務を中心とした第三者からの学校法人評価を確認し、経営改善に資する有益な情報を得ることなどを目的に、格付の取得に至った。これを受けて柳谷孝理事長は「歴史と伝統に甘んじることなく、多様性ある教育・研究への支援と健全経営を推進していきたい」と意気込みを語った。

主な格付理由は以下のとおり。

(株)格付投資情報センター発表から抜粋)

*百三十年を超える歴史に支えられたブランド力、卒業生の厚み、「就職の明治」と評される就職実績、駿河台をはじめとするキャンパスの立地の良さなどが評価され、総志願者数は全国トップクラスを維持している。併願の影響を除いた実志願者数の水準も高く、学生募集力は極めて強い。

*教育力の向上に向けて、留学がしやすくなるような授業時間割の見直しなど総合的教育改革を進めている。こうした取り組みは外部からも評価されており、文部科学省の大型事業であるスーパーグローバル大学創成支援事業にも選ばれた。研究・知財戦略機構を設け、研究力の強化も進めていて、複雑な数理科学を研究する「先端数理科学インスティテュート」などは注目度が高い。

*社会・地域連携にも力を入れており、生涯教育を担うリバティアカデミーが日本有数の規模に育っている。また、図書館を通じた地域社会への貢献なども評価できる。

●明大出身政財界人との懇談会

百人以上がヒューマンネットワークを構築

明治大学は三月一日、ヒューマンネットワークの構築・強化を目的とした本学出身の政財界人との懇談会を駿河台キャンパス・ア

カデミーコモンで開催した。国会議員や首長、上場企業の役員ら約百人が、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長ら大学役員・役職者と懇談した。

冒頭、あいさつに立った柳谷理事長は、一堂に会した明大人に謝意を示すとともに、今年で創立一三六年を迎えた本学の最近の動向を報告。「一四〇年、一五〇年と将来を見据えた中期計画を進める最中。これからも皆さまでからのご指導・ご支援をお願いしたい」と引き続きの協力を求めた。続いて、土屋学長は、国際化や研究推進などの取り組み状況を紹介し、「それぞれの分野で『権利自由』『独立自治』を体現されている政財界人の方と協力し、明治大学を前進させていきたい」と抱負を述べた。

出席者からは政界を代表して衆議院議員で内閣官房副長官を務める萩生田光一氏(一九八七年商学部卒)、財界を代表してJ・フロントリテイリング(株)代表取締役社長の山本良一氏(一九七三年商学部卒)がそれぞれ登壇。「永田町で活躍する明大人は決して多くはないが、学生時代に培った社会性を武器に、共にスクラムを組み、日本を前へ進めていく姿勢を示していきたい」(萩生田氏)、「ビジネス界は、今までの常識が通用しない時代に突入している。前向きに世の中を変えようとする志を持ち、組織で活躍できるよう

な人材を明治大学から輩出してほしい」(山本氏)などとあいさつした。

向殿政男校友会長の乾杯でスタートした懇談会では、政財界人と大学関係者はもちろん、随所で活発に意見交換や談笑する姿が見受けられ、盛大かつ有意義な会合となった。

●OB社長

▽キョーリンメデイカルサプライⅡ 二井康夫氏(一九八〇年商学部卒・五十九歳)

▽マリンフーズⅢ 三國和浩氏(一九八四年農学部卒・五十六歳)

▽高松コンストラクシヨングループⅡ 吉武宣彦氏(一九七六年商学部卒・六十四歳)

▽大和ハウスパーキングⅡ 田村哲哉氏(一九八六年商学部卒・五十五歳)

※大和ハウス工業上席執行役員も兼務

▽協立情報通信Ⅱ 長谷川浩氏(一九七九年商学部卒・六十歳、五月二十五日就任予定)

▽ロジステイクス・ネットワークⅡ 濱田茂樹氏(一九八七年商学部卒・五十四歳、六月一日就任予定)

●OB市長

▽和歌山県海南市長(四月九日告示・無投票)

神出政巳氏(無所属④、一九七五年大学院工学研究科修了・六十六歳)

●駐日米国臨時代理大使が来校 学生によるキャンパスツアーも

在日アメリカ大使館のジェイソン・P・ハイルランド臨時代理大使が三月二十二日、駿河台キャンパスを訪れ土屋恵一郎学長、柳谷孝理理事長ら大学役職者と懇談を行った。

これは、大学教育に関心が高いハイランド臨時代理大使の意向を受け実現したものだ。懇談では、明治大学の特長や学部を中心に、新たな学生交流や留学制度の開拓を進めていること、また創立以来、女性が活躍しており、現在も女子学生からの人気が高いことなど、幅広い話題が取り上げられた。

懇談に続き行われたキャンパスツアーでは、政治経済学部の海野素史教授に加え、ニューヨーク州立大学ニューパルツ校に協定留学をした長澤悠太さん(政経3)、ジョージア大学に協定留学をした清水彩さん(文3)が案内役を担当。リバイタワー二十三階の岸本辰雄ホールをはじめ、博物館、阿久悠記念館などを案内した。博物館では、昭和期の教室を再現したコーナーに立ち寄り、ハイルランド臨時代理大使が教壇に立ち、学生が授業を受ける風景を演出し楽しむ場面もあり、学生にとって貴重な経験となった。

明治大学はアメリカの大学との留学プログラムを拡充に力を入れており、二〇一六年度は明大生三百八十四人がアメリカ留学を経

験し、アメリカから八十人の留学生が明治大学で学んだ(ともに短期プログラムを含む)。

●発禁本の書誌目録を出版

『明治大学図書館所蔵 城市郎文庫目録』
明治大学図書館は、著名な発禁本の蒐集家である故・城市郎氏旧蔵書の書誌目録『明治大学図書館所蔵 城市郎文庫目録』をこのほど出版した。

三月二十八日、駿河台キャンパスで行われた記者会見には、山泉進図書館長と目録の監修を務めた中京大学文学部の浅岡邦雄教授が出席。駆けつけた多くの報道陣を前に山泉図書館長は、『権利自由』を建学の精神とする明治大学に城市郎氏の蔵書が寄贈されたことはとても縁深い」とした上で、「目録出版をきっかけに表現・出版の自由の大切さについて考えてほしい」と述べた。続いて、浅岡教授が出版検閲の歴史について説明を行い、目録の見どころや寄贈図書について解説を行った。

●事務組織改編

「人事部」「大学支援部」を新設

明治大学は、時代の変化や社会の要請に対応した大学運営を図るべく、四月一日より事務組織を改編し、新たに「人事部」「大学支援部」を設置した。

人事部は、本学が持続的に発展していくために、大学の構成員として一翼を担う職員個々の能力を向上させ、人事機能および職員組織全体の高度化を目指す。人事課（総務部より改編）と人事企画課（新設）の二課から成る。

大学支援部は、校友や父母に対し、大学からのタイムリーな情報やサービスの提供などの支援を強化することで、より身近な存在となる大学への共感や理解の深化を図る。大学支援事務室（旧募金室）、校友連携事務室（旧校友課）、父母会連携事務室（旧父母会事務室）の三事務室で構成される。

このほか、ユビキタス教育推進事務室が教育支援部から情報メディア部に移管。大型プロジェクト研究推進事務室は廃止され、その事業は研究推進部内で継続される。

●新役職者が決定

任期満了に伴う教員の新役職者が四月一日付で就任した。

文学部は合田正人教授、総合数理学部は荒川薫教授が新学部長に就任。出見世信之商学部長、小西徳應政治経済学部長、久保田寿夫理工学部長、吉村孝司専門職大学院院長は再任された。以上六氏は、学校法人明治大学寄附行為第十七条第二項第一号の規定により、同日付で職務上の評議員となった。任期はい

ずれも二〇一九年三月三十一日まで。

このほか、副教務部長に瀬倉正克政治経済学部教授が新たに就任し、図書館長は山泉進法学部教授、和泉委員会委員長は桑森真介商学部教授がそれぞれ再任した。また、学生相談員長に且敬介国際日本学部教授、研究企画推進本部長に中別府修理工学部教授、人文科学研究所長に豊川浩一文学部教授、社会科学研究所長に村田潔商学部教授、科学技術研究所長に古谷英二理工学部教授が就任し、長嶋比呂志研究活用知財本部長は再任された。任期は、副教務部長、図書館長、学生相談員長、研究企画推進本部長は二〇一八年三月三十一日、それ以外は二〇一九年三月三十一日までとなる。

●世界に広がる協定校

四十八カ国・地域三百大学と協定

明治大学は、新たに海外の六大学、リオ・ブランコ大学（ブラジル・私立）、カリフォルニア大学ロサンゼルス校サマーセッションズ（アメリカ・州立）、スタンフォード大学サマーセッション（アメリカ・私立）、テンプル大学（アメリカ・州立）、ホーチミン市建築大学（ベトナム・国立）、アジア工科大学院（タイ・国際機関）と大学間協力協定を締結した。協定校はこれで四十八の国と地域、三百大学（部局間協定を含む）となっ

た。（四月十二日現在）

●鯖江市が創立者・矢代操を描いた演劇上演

創立者の一人・矢代操の生誕地である福井県鯖江市は三月十二日、市民参加型演劇「青雲の人々矢代操、明治大学創立への道」を同市文化センターで上演した。

明治大学は、創立一三〇周年を迎えた二〇一一年十一月に同市との連携協定を締結し、同市と協働した取り組みを進めてきた。このような経緯の下、地域活性化を目的として市民パワーを結集した市民参加型演劇の第四弾として実現したものである。

演劇のストーリーは、幕末に鯖江藩士の三男として生まれた松本美太（後の矢代操）が、明治法律学校を創立するまでの半生を描いたもの。鯖江市の地域活性化に取り組み地元的女子高生たち（鯖江市役所JK課）が、「青雲の志」に燃え、ひたすら夢に向かって歩み続けた矢代操の奮闘の足跡を検証するというユニークな設定で、牧野百男鯖江市長も自ら出演するなど、さまざまな趣向を凝らした作品となった。

上演後には、多くの観客から「今までは名前しか知らなかった鯖江出身の矢代操という人物を改めて知る、いい機会となった」という声がかかるなど、好評を博した。

鯖江藩出身の矢代操が、明治大学の創立

者の一人であるということが県内で認知されるようになったのは、おおよそ六十年前。壮年期の三十九歳という若さで逝去したこともあり、県内での知名度は必ずしも高くはなかった。その後、矢代操を顕彰しようとする動きが高まり、明治大学、鯖江市、校友会福井県支部とが協力し、胸像を同市内に建立したほか、矢代家の旧宅地を取得・整備するなど、地元での知名度向上を図っている。

●校友会が卒業生の活躍を表彰 ウエルカムパーティーも盛大に

校友会は三月二十日、学業やスポーツなどの分野で優秀な成績や顕著な功績を残した卒業生・団体を表彰する、二〇一六年度「校友会卒業生表彰式」を駿河台キャンパス・紫紺館で挙行了した。

表彰式には、表彰を受ける卒業生やその父母、校友会役員をはじめ、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長ら大学役員・役職者などが多数出席。向殿政男校友会会長は「人が嫌がることも前向きに率先してやる力強さ、その人間力こそが明治大学の良さ」とした上で、「今後はリーダーとして社会で活躍してほしい」と受賞者をたたえ、各賞の受賞者・団体の代表者一人ひとりに表彰状を手渡した。

続いて、柳谷理事長が「窮地や困難の中でも立ち向かう姿勢、主体性と責任をもって

今後も力を発揮してほしい」、土屋学長が「日本全国、海外で明治のネットワークがある。これからは皆さんがその一員として役割を担う番だ」と、それぞれ祝辞を贈った。

最後に、特別表彰を受けた保利武志さん（大学院先端数理科学研究科）が受賞者を代表してあいさつ。恩師、関係者へ謝辞を述べるとともに「四月からは博士後期課程に進み研究を続ける。今後も、大学の発展のために精一杯努めたい」と、力強く意気込みを述べ、締めくくった。

表彰式後、会場をアカデミーコモンに移して「校友会入会記念ウエルカムパーティー二〇一七」が開催され、卒業生や在校生、校友など約三百八十人が参加した。

会場では参加者へのインタビュー企画や、学生を対象とした抽選会などの催しが行われ、出身地別に分けられたテーブルでは、校友と学生が世代の垣根を越えて懇談する様子が見られた。締めくくりには応援団のリードのもと、参加者が肩を組んで高らかに校歌を斉唱。明治はひとつを象徴したパーティーとなった。

●二〇一六年度スポーツ表彰式

**明大アスリート十九団体、九十七人が国内
外で活躍**

二〇一六年度の「スポーツ表彰式」が三

月二十五日、駿河台キャンパス・アカデミーコモンで催された。これは、国内外の大会で優勝するなど、各種スポーツで顕著な成績を残した体育会の団体・個人を表彰するもので、優秀賞・敢闘賞を合わせて十九団体、九十七人が表彰を受けた。

式には受賞者のほか、体育会会長を務める土屋恵一郎学長ら大学役員・役職者、体育会各部の部長・監督らが列席。冒頭、あいさつに立った土屋学長は「スポーツは国境、人種、格差を越える。これからもスポーツを糧に世界の一員として生きてほしい」と、激励した。

表彰状授与に続き、体育会部長会の井上崇通会長（硬式野球部部長）と、体育会監督会の宮田知副理事長（ホッケー部監督）が祝辞。「競技を通じた自己研さんを今後も生かして」（井上会長）、「明大アスリートとしての誇りを胸に社会でも活躍を」（宮田副理事長）と、それぞれ熱いエールを送った。

最後に、受賞者を代表して剣道部の大亀杏選手（商4）が登壇し、「苦しい時や辛い時も、監督・コーチをはじめ周囲の方の激励によって、勝利への喜びに変えることができた。明大での四年間を財産に、後輩たちのよき模範となれるよう努力したい」と、謝辞を述べた。

●リバティアカデミー

二〇一七年度開講オープン講座

『ラグビーW杯二〇一九に向けて』を開催

明治大学の生涯学習機関・リバティアカデミーは四月一日、二〇一七年度開講オープン講座「ラグビーW杯二〇一九に向けて」を歴史的勝利の裏側と新たなステージへ」を駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催。あいにくの雨天にも関わらず、約八百人もの人で会場が埋め尽くされた。

第一部では「勝利のためのマネジメント」と題して、元ラグビー日本代表キャプテンの廣瀬俊朗氏が基調講演した。廣瀬氏は、二〇一五年ラグビーW杯イングランド大会で強豪・南アフリカを相手に大金星をあげた当時のチームを振り返りながら、多様な背景を持つメンバーを心理学や組織論を取り入れながらまとめ上げたことなどを解説。「日本代表の歴史的勝利は、準備を欠かさずに積み重ねた結果だ」と熱弁をふるった。

第二部のパネルディスカッションでは、「ラグビーW杯二〇一九に向けて」をテーマに、廣瀬氏に加え二〇一五年W杯で活躍した畠山健介氏（サントリーサンゴリアス所属）、田村優氏（キヤノンイーグルス所属、二〇一一年文学部卒、体育会ラグビー部出身）の二選手と小笠原泰国際日本学部教授が登壇。ラグビージャーナリストの村上晃一氏が進行役

を務めた。自国で開催されるW杯について、畠山氏は「二〇一九年はあくまで通過点。後で振り返った時に、日本ラグビー界が大きく変わるきっかけとなった年となれば」、田村氏は「何よりも選手としてフィールドに立ちたい。そのために今できるパフォーマンスを磨いていきたい」とそれぞれ思いを語った。また、一定の基準を満たした場合に外国人選手が別の国の代表として出場できるラグビー特有の国際ルールについて話題が及ぶと、小笠原教授が「日本が目指すべき多様化した組織を示す最もよい例だ」と言及。これを受けて村上氏が「ラグビー界では当たり前のことだが、これからもっと発信していく必要がある」と返すなど、白熱した議論が展開された。

現役選手らの真剣かつ時に軽妙な話しぶりに会場が笑いに包まれる場面もあり、講座は大盛況のうちに幕を閉じた。

●女性のためのスマートキャリアプログラム
五期生四十七人が入校

リバティアカデミーは四月八日、履修証明プログラム「女性のためのスマートキャリアプログラム」の五期生（二〇一七年度春期）四十七人の入校式を、駿河台キャンパス・グローバルホールで挙行了した。

入校式は、竹本持副学長（社会連携担

当、農学部教授）、リバティアカデミー長の
大友純商学部教授によるあいさつで開式。続いて、女性専門職のための人材紹介業務や、多様な働き方の推進事業を手掛けている（株）ワリス代表取締役・共同創業者の田中美和氏による「リトライの時代」女性が自分らしく働き続けるために」と題した記念講演が行われた。田中氏は、女性向け情報誌の編集記者を経て、起業した経験を踏まえながら、平均寿命百年時代に、女性が生き生きと働き続けるための具体的解決法や、変化に対応できる柔軟性の大切さを熱く語った。

社会連携機構副機構長の矢ヶ崎淳子法学部教授は閉会のあいさつで、ワーキングマザーとして子育てと仕事を両立してきた自身の体験談を披露。さらに、「受講を通じて、豊かなキャリアを作ってほしい」と受講生を激励した。

本プログラムは、出産や育児などで仕事を離れた女性やキャリアアップを目指す女性を対象に、将来のマネジメント層となり得る人材の育成を目的として、二〇一五年度に開講。文部科学省「職業実践力育成プログラム」（BP）に認定されている。

●就職の明治支援体制をPR

第二十五回マスコミ交流会を開催

明治大学広報戦略本部（本部長 飯田和

人経営企画担当常勤理事)は三月二十四日、第二十五回マスコミ交流会「就職活動スタート!」就職の明治」の取り組み」を駿河台キャンパス・アカデミーコモンで開催。新聞・雑誌記者などのマスコミ関係者約七十人が来場した。

第一部では、三月から解禁となった企業の採用情報の公開を受け、本格化する今年度の就職活動と本学の就職支援体制について、就職情報サイト「リクナビ」の副編集長である森田友幸氏(株)リクルートキャリア、二〇〇九年情報コミュニケーション学部卒)と福田敏行就職キャリア支援部長が講演した。森田氏は、ここ数年の傾向であるインターンシップ実施企業数の増加について言及し、「今後さらに伸びるのでは」と解説。さらに、明治大学の就職支援体制について、教職員による手作りの支援行事やノウハウを列挙し、「これだけ手厚い支援は他大学にはない。学生はどんどん利用すべき」と語った。続いて福田部長は、本学の就職支援の現場を七項目に分けて紹介。中でも本学が他大学に先駆けて制作し、今では明大生の就活必須アイテムとなった「就職活動手帳」と「キャリア手帳」を披露し、来場者にも配布した。

会場を移して行われた第二部では、名刺交換・交流会を実施。大学役職者とマスコミ関係者らが情報交換する様子が会場のあちこ

ちで見られるなど盛況。今後も時節にあったテーマで開催し、学術・研究に関わる取り組みを、広く学外に発信していく。(記事中の役職名は当時)

●スポーツ領域の体制強化

ベースタイズ前球団社長 池田純氏を招聘

明治大学は、大学スポーツのさらなる振興を図るべく、プロ野球・横浜DeNAベイスターズ前球団社長の池田純氏を学長特任補佐として招聘した。

池田氏は、横浜DeNAベイスターズの初代社長としてさまざまな改革を主導し、球団の黒字化に成功。その手腕を生かし、明治大学のスポーツ領域を戦略的かつ一体的に統括し、大学スポーツ振興のための施策の検討、諸課題の研究・分析などを行う。

四月三日、駿河台キャンパス・紫紺館で行われた記者会見で池田氏は、「大学スポーツには可能性がある。スポーツを通して学生、卒業生、地域、行政、企業などとのつながりを広げていきたい」と意気込みを語った。

●応援団へ校旗「返還式・貸与式」を行う

新年度を目前に控えた三月二十五日、明治大学校旗を大学から体育会応援団に貸し出す「校旗返還式・貸与式」が、駿河台キャンパス・リバティタワー二十三階の岸本辰雄

ホールで執り行われた。

あいさつに立った柳沢敏勝副学長(スポーツ振興担当)は、「応援団は明治大学の宝のひとつ。その期待とこれまでの歴史を胸に、今後も努力を忘れず研さんを続けてほしい」と激励し、校旗を貸与した。

校旗を受け取った新団長の新宅杏子さん(政経3)は、「校旗とともに応援できることを誇りに思う。明大生として、一人の人間として成長できるよう、応援団の活動に励んでいきたい」と引き締まった表情で誓った。

明大史上初、女性応援団長となった新宅さんはこれまで、吹奏楽部の一員として活動。二〇一七年の新体制発足とともに、歴史と伝統ある明大応援団の第九十六代団長に就任した。「団員一人ひとりが輪を重んじつつ、個人の意思をもって行動し、応援団の発展に尽力する。時代在先駆けた応援団」を目指したい」と語る新宅さん。明治大学史上初の女性応援団長の挑戦が今始まる。

◆駿台トピックス

●第十一回オープンゴルフコンペを開催

第十一回目になるオープンゴルフコンペが、四月十二日、千葉県・南総カントリークラブで開催されました。残念ながら参加者はあまり多くありませんでしたが、好天に恵まれ、絶好のゴルフ日和となりました。

ペリア方式による成績結果は、優勝は宮下隆会員（昭和五十三年・政経卒）、準優勝は最近入会されて、ゴルフコンペ初参加の田中孝明会員（昭和五十五年・工卒）、第三位は南総カントリークラブの理事を務められている苅部彰夫会員（昭和四十三年・法卒）で、陶芸家の武内裕会員から寄贈された陶器が副賞として贈られました。ベストグロス賞は唯一80代で回った中川敏洋会員（昭和四十七年・経営卒）でした。



◆退会会員

（平成二十八年四月～二十九年三月）
 芦澤美佐子、阿部剣朗、板橋光一、海野美津雄、押田裕介、片倉洋、加藤孝之、上岡一雄、木野幸士、國井英夫、窪田芳郎、兒玉康資、小林正明、小林芳郎、小谷野正道、齋藤文孝、鈴木俊光、富田正一、長見茂、夏井丈俊、樋口郁夫、比良田幸雄、布田安男、安

河内究、山浦晟暉、山形雅之助、山崎行雄、山下善久、結城和正、結城康郎（故人）、吉村國廣、渡邊智恵子
 （敬称略）

◆三月例会出席者

青木孝、青木幹則、青柳勝榮、坪昭二、浅井宏、飯田和人、池田勝也、石川かおり、石川均、伊東正博、伊原敏雄、植木榮、上田廣一、同ご友人、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、宇敷和章、同ご友人、大野正美、大原幸男、大前実之、大村託現、大山卓良、岡田茂、勝俣正義、金子圭太、栢森靖、苅部彰夫、河村博、清野明男、杏掛英二、小山修、小山

有彦、根田哲雄、斎藤柳光、坂田英夫、佐藤和正、佐藤健、佐藤仁、眞田暉、佐野公哉、佐野径、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、関孝夫、同令夫人、関根均、相臺志浩、高澤徹、竹下衛司、武田宣夫、館林精二郎、田村駿、常泉邦彦、当山明彦、富水流孝二、中川敏洋、長堀守弘、中村豊、並木洋一、西澤豊、西山武夫、二宮充子、長谷川進一、同ご友人、塙英幸、馬場範夫、原田榮、福田和彦、榎野泰、摩尼和夫、宮坂寿彦、宮下隆、向殿政男、村岡健、室井恵明、森一朗、柳谷孝、山上雅隆、山口政廣、山田朝彦、山田勝、結城和正、弓野理恵、義江邦夫、米山明広

【編集後記】

好天と日程に恵まれた今年のゴールデンウィークは、海外で過ごされた方も多くいらっしやうと聞きますが、会員の皆様におかれましては、いかがが過ぎましたでしょうか？

さて私の人生も早いもので約半世紀、そこで、明大卒の同世代のアスリートを調査してみました。まず、思い浮かんだのが、経営学部の先輩である小川直也さん。小川さんは柔道家だけでなく格闘家やタレントとして、今も活躍されています。学年では一つ上の先輩であり、生まれは一九六八年三月と半年先輩です。明大前の同じ教室で定期試験を受けたことを覚えています。同じく柔道家で金メダリストの吉田秀彦さんは一九六九年九月生まれ、一年後輩です。同じ吉田さんでもラグビーの吉田義人さんを忘

れてはいけません。義人さんは一九六九年二月生まれと半年後輩です。徹夜して買ったチケットで応援した雪の明早戦は、今でも忘れられません。そしてスポーツ観戦にはいつも校歌をみんなで大声で歌っていました。

しかし、近年では校歌を歌えない学生が増えていると聞きます。以前では想像できませんが現実なのです。対策の一つとして、明大前駅での列車接近メロディに、明大校歌が流れることになりました。これをきっかけに明大生全員が校歌を斉唱でき、母校愛が増すことを心から願うばかりです。

近年は春と秋が短く、暑さへの対策が必要です。真夏日も出始めるため、熱中症対策をしっかりとして、どうかお体には十分お気をつけ下さいませ。会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

（宮本浩二）